

毛原遺跡発掘調査概要

－毛原廃寺 2022年度範囲確認調査－

令和5（2023）年3月

奈良県山添村教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所

序 文

毛原廃寺は、山添村大字毛原地内にある奈良時代前半に創建された寺院です。大正15年度に国の史跡として指定され、令和3年度には、これまでの調査成果などから西方地区が追加指定されました。これまで行政や地域によって調査・研究や保護・活用に向けた取組が行われてきた重要な遺跡です。

本調査は、小字シノノで確認されたとされる塔心礎を含む毛原廃寺の規模を明らかにするために実施しました。調査の結果、溝・土坑・ビットなどが検出されました。塔心礎および塔に関する造構を確認することはできませんでした。しかし、周辺には何らかの建造物が存在する可能性があるため、さらなる調査・研究を進めていきます。

最後になりましたが、現地での調査や報告書の作成まで多大なるご協力をいただきました奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、山添村毛原区および関係機関、関係者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

令和5年3月31日

奈良県山添村教育委員会

教育長 池住 寿弘

例　　言

1. 本書は奈良県山辺郡山添村大字毛原に所在する、毛原遺跡の発掘調査概要報告である。
2. 本発掘調査は令和4（2022）年に山添村が奈良県立橿原考古学研究所の協力を得て実施した遺跡範囲の確認調査である。
3. 調査期間と調査面積は以下のとおりである。

期間：令和4（2022）年4月28日～6月9日

面積：725m²

4. 概報の作成・編集は令和4（2022）年5月～令和5（2023）年3月に実施し、奈良県山添村教育委員会事務局の向井一俊（主事）と奈良県立橿原考古学研究所の岡田雅彦（主任研究員）が担当した。調査及び概報作成体制は、以下のとおりである。

奈良県山添村教育委員会

教　　育　　長	池　住　寿　弘
事　務　局　長	馬　場　宏　樹
事務局長補佐	大　西　重　彦　吉　矢　真　起
主　　事　　事	向　井　一　俊（調整・事務処理担当）

奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課

課　　長　　長	三　浦　康　生
課　長　補　佐	鈴　木　裕　明
調　整　員　員	本　村　充　保
主　　查　　查	中　野　咲　宇　野　隆　志

奈良県立橿原考古学研究所

所　　長　　長	青　柳　正　規
副　所　長　長	大　峯　朝　記　岡　林　孝　作
調　査　部　長	川　上　洋　一
調　査　課　長	大　西　貴　夫
調査第一係長	米　川　裕　治
主任研究員	岡　田　雅　彦（発掘調査担当・概要報告作成）
主任研究員	辰　巳　祐　樹（地中レーダー探査）

5. 現地の発掘調査及び本概報の作成のために、以下の協力があったので記して感謝の意を表したい。

（個人）福井新成、福井一成、奥中義美、山中孝、山中政明、山中幸夫、神崎智子

6. 調査に関わる出土遺物や遺構図面、写真資料などの調査記録は奈良県立橿原考古学研究所に保管している。

7. 奈良県遺跡地図における遺跡番号は、毛原遺跡（102-0013）である。

奈良県立橿原考古学研究所の調査番号は022010である。

本文目次

序文

例言

1. はじめに	1
2. 調査内容	4
3. 出土遺物	7
4. 地中探査	7
5. おわりに	8

挿図目次

図1 毛原廃寺位置図 (S=1/40,000)	2
図2 毛原廃寺周辺図 (S=1/10,000)	2
図3 トレンチ配置図 (S=1/2,000)	2
図4 1~6 トレンチ平面図 (S=1/200)	3
図5 トレンチ平面図・壁土層図 (S=1/100)	5
図6 出土土器・瓦実測図 (S=1/4)	6
図7 採査範囲及び採査測線方向 (S=1/300)	7
図8 毛原遺跡におけるGPR採査結果	10

表目次

表1 出土遺物観察表	6
------------	---

図版目次

PL. 1 1 調査地全景 (上が北)	11	9 5 トレンチ全景 (南から)	12
2 1 トレンチ全景 (南から)	11	PL. 3 10 5 トレンチ SP02 (南から)	13
3 2 トレンチ全景 (東から)	11	11 5 トレンチ SP03 (東から)	13
PL. 2 4 2 トレンチ SD01 (東から)	12	12 5 トレンチ SP04 (東から)	13
5 2 トレンチ SK01 (北から)	12	13 6 トレンチ全景 (北から)	13
6 2 トレンチ SP01 (南から)	12	14 6 トレンチ SK02 (東から)	13
7 3 トレンチ全景 (東から)	12	15 6 トレンチ SD02 (西から)	13
8 4 トレンチ全景 (南から)	12	16 6 トレンチ SP05 (南から)	13

1.はじめに（図1・2）

毛原庵寺は、奈良時代前半に建立された寺院である。毛原庵寺に関する史料は一切残されておらず、当時のどのように呼ばれていたか明らかになっていないため、字名を冠して毛原庵寺と呼ばれている。

毛原庵寺には、現在も南門・中門・金堂の礎石が残されている。当時の都から東へ遠く離れた山中に存在するにも関わらず、現地に残されている礎石は平城^{へいじょう}京内の著名な大寺院と同レベルの加工技術が用いられていること、大寺院と同規模の建物が存在することなどから、大正15（1926）年度国史跡に指定された。また令和3（2021）年度には、平成28・30（2016・2018）年度の調査成果などから西方地区についても追加指定された。

山添村では、史跡毛原庵寺跡の史跡整備に向け、文化庁埋蔵文化財緊急調査費国庫補助金を活用して令和3（2021）年度から毛原庵寺範囲確認調査を開始しており、今年度で2年目となる。

今回発掘調査をおこなった地区の小字はシノノで、昭和13（1938）年に塔心礎が確認されたと伝承されている地点である（以下「シノノ地区」とする）。南門跡から南東約270mに位置する地点であり、「奈良県遺跡地図」では「毛原遺跡」として登録されている。

シノノ地区に心礎等があったことを示した最も古い文献は、大正7（1918）年の西崎辰之助氏の報告である。報告には「……伽藍跡の東南二町半許りの下方に、礎石と見ゆるもの三個ばかり地下深く埋没せりと、今回これを調査すること能はざりしも、……」とあり、シノノ地区付近に礎石の位置が示されている。このことから、シノノ地区に心礎等があることは地元では知られていたものと考えられる（西崎1918）。

昭和13（1938）年6月14日の「大阪朝日新聞（奈良版）」によると、奈良県技師岸熊吉・黒田界義氏によって南門跡から南東にボーリング調査が進められ、南門跡から南東に直線で950尺（約288m）の桑畑での発掘調査で直径3尺（約0.9m）の花崗岩中央に舍利孔を持った塔心礎が確認されている（註1）。但し、この調査の報告が「大阪朝日新聞（奈良版）」のみにしかないと、掲載されている写真が心礎の近接写真であったことなどから、詳細な場所を特定することができないでいた。しかし近年に至り、昭和13（1938）年当時に調査に参加した地元住民からの聞き取り（註2）などがおこなわれたことで、シノノ地区の現在茶畑となっている地点が最有力候補として位置が示されてきた（山添村他1990、松田他1991）。そして、この地点は「大阪朝日新聞（奈良版）」に記載される南門跡から約950尺に近い位置にある（註3）。

平成元（1989）年度には、調査地の南側で圃場整備にともなう発掘調査がおこなわれたが、塔心礎伝承地は圃場整備から外れており、塔心礎の有無は確認されなかった。また、調査の結果、古代の遺物包含層は確認されたが、毛原庵寺にともなう遺構は確認されなかった（山添村他1990）。

以上のことから、今年度の調査は、塔心礎が埋没すると伝承されている地点で、塔心礎および基壇の有無を明らかにすることを目的とした。また、周辺の畠地でも耕作中に大きな石を見つかったとの地権者の報告もあることから、伝承地周辺に調査区を設定して発掘調査をおこなった。



図1 毛原庵寺位置図 (S=1/40,000)
国土地理院発行1/25,000地図図「毛塗」を加工して作成



図2 毛原庵寺周辺図 (S=1/10,000)
山田村1984『集落図9(毛原)』を加工して作成

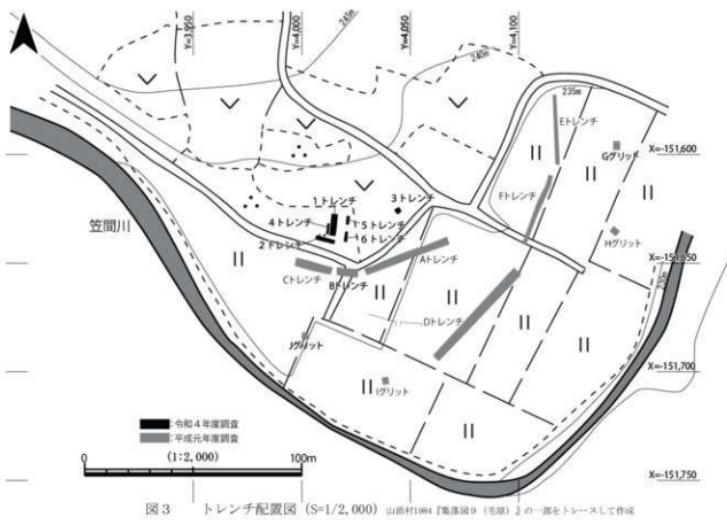


図3 トレンチ配置図 (S=1/2,000) 山田村1984『集落図9(毛原)』の一部をトレスして作成

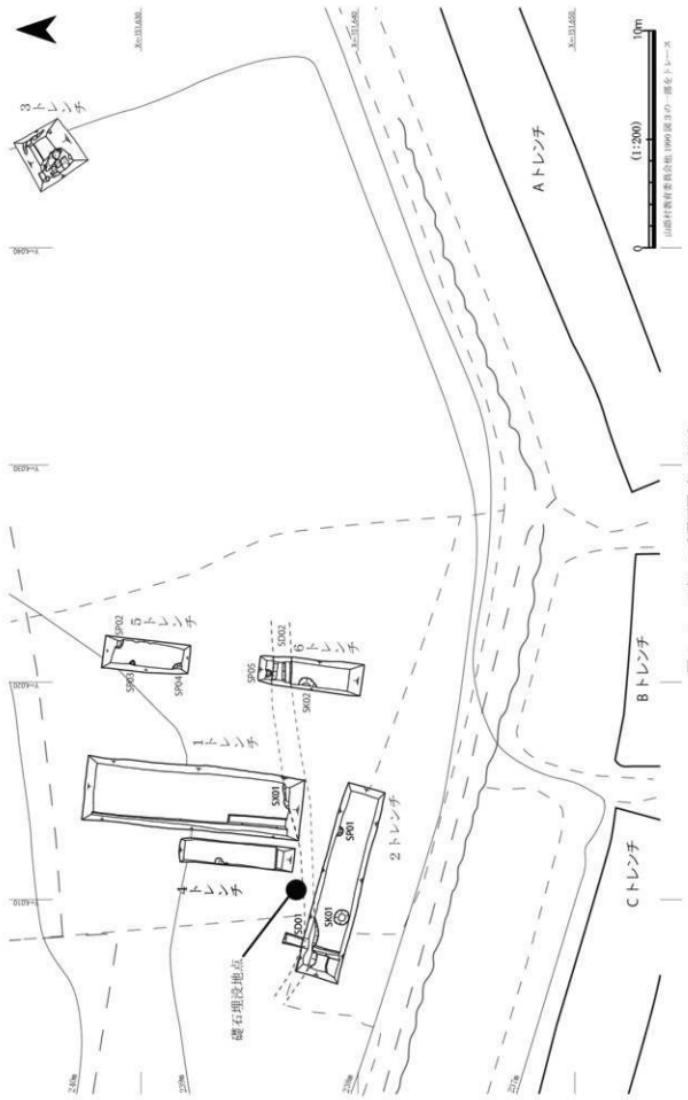


図4 1～6 レンチ平面図 (S=1/200)

2. 調査内容（図3・4）

塔心礎が埋没すると伝承されている地点とその周辺において6つの調査区（1～6トレンチ）を設定した。また、塔心礎の位置が不確かであるため、トレンチ調査と並行して地中レーダー探査を用いて塔心礎の位置確認も進めた。ただし、調査前の段階で調査対象地全てにおいて探査ができる環境が整っていなかったため、調査前の令和4（2022）年4月16日は2・3トレンチ周辺、1～4トレンチの調査が完了した6月1日は1・4トレンチ周辺と探査を2回に分けることとなった。4月16日の探査では、遺構の可能性がある反応は確認できなかった。6月1日の探査では、昭和13（1938）年のトレンチや塔心礎は確認できなかったものの、土坑（5トレンチ）や^{どうこう}溝（6トレンチ）の可能性が高い反応があったため、5・6トレンチの追加調査をおこなった。

1トレンチは幅3m・長さ10m・面積30m²、2トレンチは幅2m・長さ9m・面積18m²、3トレンチは2.5m四方・面積6.3m²、4トレンチは幅1m・長さ5.2m・面積5.2m²、5トレンチは幅1.5m・長さ4m・面積6m²、6トレンチは幅1.5m・長さ4.7m・面積7m²である。

基本層序は、I層：現代耕作土、II層：自然堆積層、III層：奈良時代の遺物を含む包含層、IV層：地山と考えられる無遺物層となる。II層は遺物を含まず細砂～粗砂を主体とし場所によっては人頭大の礫が混入することから、既往の調査で山崩れの際に堆積した層とされているものと同じ層と考える。IV層は重機でも掘削できないほど固く締まっており、遺物も出土しないことから地山と判断した。この基本層序は、平成元（1989）年度におこなわれた調査地南側の基本層序と同じである（山添村他1990）。遺構検出は地山と判断したIV層上面でおこなった。

塔心礎は昭和13（1938）年に発掘調査されているため、I層を除去するとその際のトレンチを確認できるはずであったが、いずれのトレンチでもその痕跡を確認することができなかつた。

1トレンチ 塔心礎が埋没すると伝承されている地点において南北方向に設定したトレンチである。遺構は南端で落ち込み（SX01）を検出した。SX01は幅0.4m以上、深さ0.3mである。III層（⑨層）を埋土とする。2トレンチのSD01、6トレンチのSD02上層と同じ溝の可能性がある。

2トレンチ 塔心礎が埋没すると伝承されている地点において東西方向に設定したトレンチである。北西隅で遺構を確認したため、西と北に一部拡張した。遺構は溝（SD01）、土坑（SK01）、ピット（SP01）を検出した。SD01は幅0.8m、深さ0.5mである。SK01は径0.7m、深さ0.4mである。SP01は径0.4m、深さ0.4mである。SD01はIII層（⑨層）を、SK01とSP01はIII層（⑫層）を埋土とする。

3トレンチ 地権者の親族から、地中に石が埋まっていると伝えられる地点である。遺構は確認できなかつた。他のトレンチと異なり、II層内に人頭大の礫が多く含まれていた。これらの礫は加工痕がないことから自然の礫と考えられる。地権者の親族が耕作中に見つけた石はこれに相当する可能性が高い。

4トレンチ 1トレンチで塔心礎が確認できなかつたため、1トレンチと茶畑の間に設定した南北トレンチである。昭和13（1938）年に塔心礎を発掘したトレンチを確認するための調査で

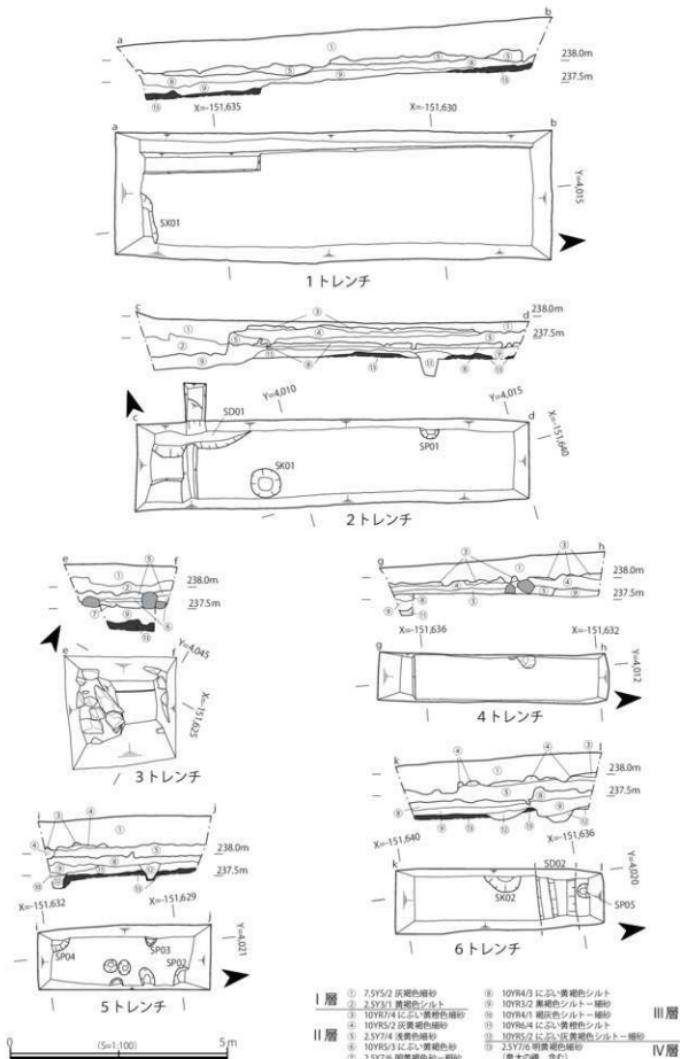


図 5 トレンチ平面図・壁土層図 (S=1/100)

あったため、Ⅲ層上面までしか掘削していない。目的としていた過去のトレンチ並びに新規の遺構は確認できなかった。

5トレンチ 1トレンチの東において地中レーダー探査で土坑状の反応があったため設定した南北トレンチである。しかし、地中レーダー探査で確認された地点に土坑状のものは確認できなかった。また、ピット3基(SP02～04)を検出した。SP02は径0.3m以上、深さ0.2m、SP03は径0.3m、深さ0.2m、SP04は径0.4m以上、深さ0.4mであった。いずれもⅢ層(12層)を埋土とする。

6トレンチ 1トレンチの東において地中レーダー探査で溝状の反応があったため設定した南北トレンチである。溝(SD02)、土坑(SK02)、ピット(SP05)をそれぞれ1基検出した。SD02は幅0.9m、深さ0.4m、SK02は径0.4m以上、深さ0.4m、SP05は径0.3m、深さ0.2mであった。SD02の埋土はⅢ層で上層(⑨層)と下層(⑫層)があり、SK02とSP05は⑫層を埋土とする。SD02が地中レーダー探査で確認した溝状の反応に該当すると考えられる。

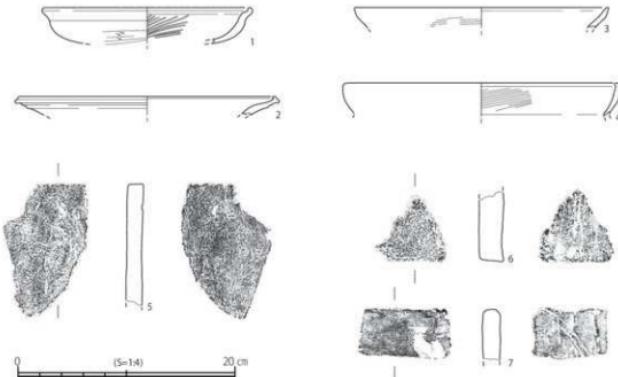


図6 出土土器・瓦実測図 (S=1/4)

種別	トレナ- 遮断-部位	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成
			1日供	器高	底径				
国5-1	2トレナ- SD01	土師器 杯A	(19.4)	(3.3)	-	(外)底部:ハラケツリ(1)縁:ヨコナデ (内)ヨコナデ、放射刷毛(1段)	(外)5V16E-6暗 (内)5V16E-6暗	黒 黒色砂粒含む	良好
2	2トレナ- 皿屋	土師器 盤	(24.4)	(1.7)	-	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	(外)7V24W-6暗 (内)7V24W-6暗	白 白色砂粒-黒色砂粒含む	良好
3	2トレナ- SD01	土師器 羹	(23.4)	(2.9)	-	(外)腹部:ハ-1.1縁部:ヨコナデ (内)ヨコナデ	(外)10V18W-4浅青 (内)10V18W-4に-5黄-黄	黒 黒色砂粒含む	良好
4	2トレナ- SD01	土師器 羹	(25.4)	(3.1)	-	(外)ヨコナデ (内)ハラ	(外)10V18W-3浅青 (内)10V18W-4に-5黄-黄	白 白色砂粒-黒色砂粒含む	良好
5	2トレナ- 皿屋	平瓦	-	-	-	(門)-部タテケツリ×リテナデ (西)腹側タキキ+リテナデ	(門)12S6V-2青黃 (西)12S6V-2青黃	黒 白色砂粒-黒色砂粒含む	良好
6	1トレナ- 皿屋	平瓦	-	-	-	(門)ナデ (西)腹側タキキ+脂サエ	(門)12S7V-3浅黃 (西)12S7V-3浅黃	白 白色砂粒-黒色砂粒含む	良好
7	2トレナ- SD01	丸瓦	-	-	-	(西)ヨコナデ (門)ヨコナデ×リヨコナデ	(門)14N-0灰 (西)14N-0灰	黒 白色砂粒含む	良好

表1 出土遺物觀察表

3. 出土遺物（図5）

遺物は、SD01及びⅢ層から出土した。大半が土器であり瓦の出土は少ない。また小片が多かつた。の中でも実測可能であった7点を報告する。遺物の年代はいずれも8世紀中葉頃のものと考えられる。

1は土師器壺Aである。b0手法で内面に一段の放射暗文を施す。平城宮土器Ⅲ期か。2は土師器盤である。蓋の可能性もある。大きく外反する口縁を持つ。3・4は土師器甕である。3は口縁外部に、4は口縁内部に刷毛目が残る。5・6は平瓦である。5は凹面の粘土板合わせ目部分にタテケズリが施される。凸面は継縄タタキの後、狭端から約12cmまで丁寧なヨコナデを施す。6は凹面に丁寧なナデを施す。凸面は継縄タタキの後、指で押された痕跡が残る。7は丸瓦玉縁部である。凸面はヨコナデ後、狭端側にヨコケズリを施す。凹面狭端側にヨコケズリを、凹面側面側に幅の広い面取りを施す。
(岡田)

4. 地中探査

毛原廃寺関連施設に関わる礎石の存在を確認するために地中探査を実施した。調査手法は、非破壊探査手法である地中レーダー探査(Ground Penetrating Radar、以下GPR)である。GPRは、異なる物質間の境界面で生じる反射波を測定することにより、地中の異物の存在を推定する手法である。礎石とその周囲の土壤などの堆積物との境界面で、明確な反射振幅の差を測定できると考えられるため、本手法を選択した。

本調査は令和4(2021)年4月16日および6月1日におこなった。4月16日に実施した探査からは、顕著な造構らしき反射が認められなかつたため、本報告では6月1日に実施した探査概要を報告する。すべての探査結果、および探査後に実施された発掘調査成果との比較検討、探査の有効性の検討などは、最終成果として別途報告する予定である。6月1日に実施した探査の測線間隔は0.5m、測定範囲はおよそ127.5m²である(図6)。探査機器にはSensors & Software社製のLMX200 Enhanced(中心周波数250MHz)、編集・解析には同社EKKO_Projectをそれぞれ使用した。

調査結果概要として、地中の電波伝達速度を0.06m/nsとして探査地全域の地表面からのおおよその深度0.6~0.8m、0.7~0.9m、1.1~1.3m、1.8~2.0mのそれぞれの疑似平面図(タイムスライス)と、顕著な反射の差異が認められた代表的な測線下の疑似断面図を図7に示す。電波の反射振幅が大きい箇所は白色、小さい箇所は黒色で表している。

探査結果からは、主目的である明確に礎石と考えられる大規模な石材の単独反射は認められな



図7 採査範囲及び探査測線方向 (S=1/300)

かった。しかし、遺構の可能性のあるものとして、複数の溝状の落ち込み、土坑状の落ち込みの存在が推定される。

まず、地表下0.6–0.8mの深度から、おおよそ東西方向に延びる3条の溝状の反射が認められる（図7 a・b、D、①）。平面図・断面図から、これらの遺構の規模として南から順にそれぞれ幅0.6m以上、0.4m、0.4m以上である。下端は不明瞭であるが、北方の2条は地表下1.0mでは地点的な反射の異常が認められないため、比較的浅い落ち込みだと推定できる（同図D横軸5・9.5m）。周囲の堆積土が欠落した箇所が規則的に溝状に延びていることや平面規模や断面規模などから、これらの一連の反射異常は、時期は明らかではないが、耕作溝と想定される。最南方の1条は、発掘調査で検出されているSD02に対応するが、他の2条は検出されなかった。

そのほかに、顕著な反射として南北方向に延びるより大規模な溝状の反射が認められるが（同図a・b、A横軸0.5–3.6m、縦軸0.6–0.9m）、これは1トレンチの埋め戻し後の状況を示している。また、地表下1.8–2.0mの深度で、上端幅2.0m程度の南北方向の溝状の落ち込みの反射も確認できる（同図d、A横軸2.0–3.8m、②）。この反射異常は、前者の耕作溝と比較すると、平面・断面形ともに大規模であり、発掘調査で確認された地山の深度より深い位置から落ち込んでいるようである。したがって、この溝状の反射は地山の凹地に土砂等が自然堆積したものに起因すると思われる。

土坑状の落ち込みと考えられる反射は3箇所認められ、1箇所は地表下0.9mの深度から探査区中央の北よりに認められる（同図b、A横軸8.4–9.2m、③）。平面形は定かではないが、測線上では幅あるいは直径0.8m程度の規模が想定される。この落ち込みの西側にも、堆積物が途絶している土坑状の様相が認められる（同図A横軸7m、④）。西側の立ち上がりは不明瞭であるが、3m程度西方を上端として緩やかな勾配で立ち上がっている可能性がある（同図A横軸4.2m周辺）。しかしながら、この反射異常の認められる地点に設定された5トレンチからは、相当する遺構や地山上の堆積物の地点的な差異は確認されなかった。

もう1箇所は、調査区西端に位置する落ち込みで、平面形は不明だが、上端幅2.2m程度、下端は地表面からの深度2.2mを測る規模を有する（同図c、B0.2–2.0m・C1.8–4.2m、⑤）。探査結果のみからでは、先述した大規模な溝状の落ち込みとの関係については疑似断面から明瞭な反射振幅の差は認められず不明である。1トレンチの発掘調査では、地山に切り込む土坑状の遺構は確認されていないため、大規模な溝状の落ち込みと同様に自然堆積物の差異を示していると考えられる。

（辰巳）

5. おわりに

塔心礎が埋没すると伝承されている地点およびその周辺においてトレンチを設定して発掘調査をおこなった結果、溝・土坑・ピットを検出した。しかし、調査地南側の圃場整備に伴う平成元（1989）年度の発掘調査成果と同様に塔心礎および塔に関係する遺構を確認することができなかつた。また、探査において溝状のものなどの存在を確認できたが、昭和13（1938）年のトレン

チおよび塔心礎は確認できなかった。そして、検出した遺構からは8世紀中葉頃の遺物が出土したが、いずれも8世紀中葉頃の遺構か断定することができない。

今回の調査地は、南80mに笠間川が流れていること、毛原廃寺の主要伽藍からみてかなり下方にあたることを考慮すると、地形的に塔があったとは考えにくい。また、毛原廃寺と近い時期と考えられる古代遺物包含層が広い範囲で確認されているが、古代遺物包含層は北から南へ下がる地形に沿って堆積している状況であること、この包含層を基壇や地業跡とするには軟弱であることからも、この地点に塔は想定できない。しかし、調査地北側に何らかの古代の遺構が存在する可能性は高いと思われる。瓦の出土が極めて少なく大半が土器であることから、毛原廃寺造営時の工房や住居が存在する可能性がある。

なお、塔心礎があった地点は桑畠であったと報告されていることから、今後地籍調査をおこない、昭和13（1938）年当時、桑畠がどこにあったのか確認する必要がある。また、調査地周辺は現在も畠などに利用されており、引き続き発掘調査をおこなうことは可能であるが、やみくもにおこなうのではなく地元地区や土地所有者住民と調整をしつつ、地中レーダー探査などから塔心礎の推定範囲をある程度確定させた上で進めるべきであろう。
（岡田）

註1 調査地は、現在利用されていないが3～4年前までは茶畠であった。いつまで桑畠であったのかを地元住民への聞き取りをおこなったが不明とのこと。「山添村史」によると、戦中まで桑畠だったところは戦後茶畠に変わったと記載されることから戦後に茶畠になった可能性が高い。（山添村1993）。

註2 「大阪朝日新聞」に掲載されていない発掘調査の詳細については、（松田他1991）に掲載されている。「調査は1m四方グリッドでおこなわれ、礎石は地表から約1mの深さのところに埋設していたというが、掘削途中に瓦などの遺物は出土したという記憶は無いようである。そして、この礎石は、中央に40～50cmの円孔を穿ったもので円孔の底にはもうひとつ孔が開いていたという。」

註3 心礎等があったとされる位置については、西崎（1918）は「二町半許り（272m）」、大阪朝日新聞は「約950尺（288m）」、毛原廃寺史跡保彰会は「350m」とばらつきがある。

参考文献

- 毛原廃寺史跡保彰会2000『毛原廃寺跡』山添村毛原区
西崎辰之助1918『毛原廃寺跡』『奈良県史跡勝跡調査会報告書』第5回 奈良県
松田真一・近江俊秀1991『毛原廃寺の研究－基礎資料の集成と若干の考察－』『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第15冊 奈良県立橿原考古学研究所
山添村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編1990『毛原廃寺周辺における遺跡調査 試掘調査報告』
山添村史編さん委員会編1993『山添村史』山添村役場

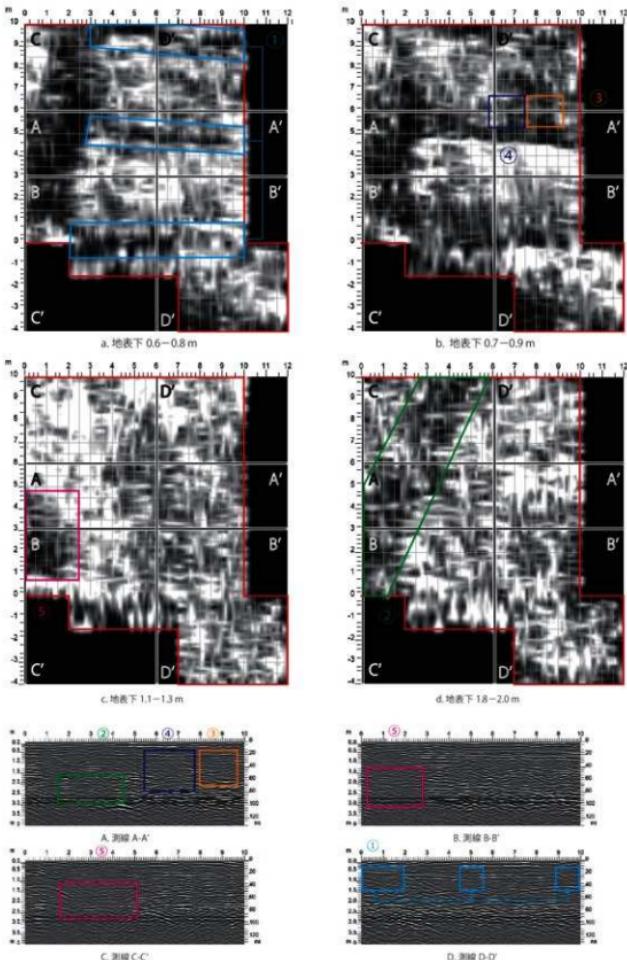


図8 毛原遺跡におけるGPR探査結果

上(a-d):疑似平面図(1:200)

下(A-D):疑似断面図(測距距離縮尺1:200)

(平面図中の黒線はそれぞれ断面測線に対応)

PL. 1



写真1 調査地全景（上が北）



写真2 1トレンチ全景（南から）



写真3 2トレンチ全景（東から）

PL. 2



写真4 2トレンチSD01（東から）



写真5 2トレンチSK01（北から）



写真6 2トレンチSP01（南から）



写真7 3トレンチ全景（東から）



写真8 4トレンチ全景（南から）



写真9 5トレンチ全景（南から）

PL_3



写真10 5トレンチSP02（南から）



写真11 5トレンチSP03（東から）



写真12 5トレンチSP04（東から）



写真14 6トレンチSK02（東から）



写真13 6トレンチ全景（北から）



写真15 6トレンチSD02（西から）



写真16 6トレンチSP05（南から）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	けはらいせき
書名	毛原遺跡発掘調査概要
副書名	毛原廃寺2022年度範囲確認調査
卷次	一
シリーズ名	山添村埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	向井一俊・岡田雅彦
編集機関	奈良県山添村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
発行機関	奈良県山添村教育委員会
所在地	〒630-2344 奈良県山辺郡山添村大字大西151 TEL : 0743-85-0049
発行年月日	令和5（2023）年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	。	。			
毛原遺跡	奈良県 山辺郡 山添村 大字毛原	293229	102- 0013	34° 38' 08"	139° 52' 25"	2022/4/28 ~ 2022/6/9	72.5m ²	毛原廃寺範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
毛原遺跡	寺院跡	奈良時代以降	溝、土坑、ピット	土器、瓦	—
要約	毛原廃寺の遺跡範囲確認のために発掘調査をおこなった。今回の調査の結果、溝・土坑・ピットなどが検出されたが、塔心礎および塔に関係する遺構を確認することはできなかった。				

**毛原遺跡発掘調査概要
—毛原廃寺 2022年度範囲確認調査—
山添村埋蔵文化財発掘調査報告書第5集**

編集・発行 奈良県山添村教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所
〒630-2344
奈良県山辺郡山添村大字大西151
TEL 0743-85-0049
FAX 0743-85-0219
発行年月日 令和5（2023）年3月31日
印 刷 共同精版印刷株式会社